

---

# CROCUS

タクミ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

CROCUS

### 【Nコード】

N0659M

### 【作者名】

タクミ

### 【あらすじ】

泉坂 要は幼いころDSの性格が悪い双子の兄鼎としたゲームで負け、xゲームとして高校に入ったら、男装をするという約束を無理やりさせられてしまった。

高校に入って本当に男装する事になった要はかなり浮いた存在となっていた。2年上がりまだ男装をしている要達の所に、双子の兄妹達が転入してきた。

そんな二組の双子を中心とした恋愛ギャグ小説。

## 異常

・・・・・・桜舞い散る春一学期。（始業式）

―もしかしたら自分はかなり馬鹿かもしれない。  
進級し一学期早々、何とも自虐的な事を考える少女泉坂 イスマミザカ 要は今年 カナメ  
の春で2年生へと進級する。成績平凡体力平凡といった至って普通の少女である。しかし彼女の格好から見て彼女を普通等と思う人間なんてまずい無いだろう。

彼女は成績体力は普通の平凡な女子高生だが、格好こそが全く普通ではないむしろ逆で異常と言うべきであった。

彼女は女であるにも関わらず、茶髪の男性用ウィッグをつけ男子用制服を着ているのだった。

顔は童顔ではあるが中性的で普通にモテる容姿はしているが、16歳ともなると男女の体格の違い等がハッキリしてくる頃だ。なので、たとえ彼女が中性的な顔で男子用制服を着ていたとしても、女である事は誰から見ても一目瞭然であった。

―それにも関わらず何故彼女は男装をしているのか・・・、今年入ってきた一年が彼女を見たとき皆思う事である。それは全校生徒例外ではなかった。

・・・・一年前の春入学式

彼女は一年の入学式から、既に男装をしていた。入学式早々周囲から冷たい視線で見られ、明らかに浮いている存在となっていた。それは彼女自身が最も良く分かっていて、自分が今している事は異常であると周囲からどんな目で見られているかという事を。

そしてそんな周囲からの視線に耐え切れなくなった彼女は、入学



## 異常（後書き）

初めて恋愛小説を書きますが、まだプロローグのような物です。これから色々登場人物達を喋らせていこうかなと思っています。かなり、更新が遅くなると思いますけどどうぞ暇さえあれば、読んでください。

## 二人

現在。始業式一時間前。まだ始業式一時間前とあってか、極少数の生徒しかいないなか、かなり目立つ格好（男装）で校門前をウロウロとしている要。そんな要に後から近づく一人の女子生徒。その女子生徒は、1メートル以上近づいても自分の存在に気づかない要の背中へと可愛らしい声を掛けた。

「要、何してるの？そんなところでウロウロしていると不審者に見られるよ」

「か、鼎、別にな、何もしてない、よ。それ、にちゃんとココの制服着て、るから不審者なんかに見られない、よ」

可愛らしい声でかけられたにも関わらず、要はあからさまにビクツとなり、少女の方へと向き、途切れ途切れで聞き取りにくい、自分の現在の格好を見て不審者と見る人間なんてココの生徒教師以外では、星の数ほど要するという事を気づかない天然発言をした。

「あれえ要、どうかしたの？何か怖い事でもあった？」

「別、に何も無いけど・・・」

鼎と呼ばれた少女は心配そうに眉を寄せて、要の顔を上目遣いで覗き込んだ。その表情だけでも、かなり絵になるほどの可愛らしさで、高校生にはとても見えない童顔低身長。なにより、誰もが純粹無垢の天使のようだと思う、容姿をもつ鼎は、高く可愛らしい誰が聞いても癒されるような声で、要に声を掛けた。かなり整った顔で上目遣いされ尚且つその愛らしい声で、自分を心配した発言をされれば男女問わず、顔を赤面し、卒倒する。要も例外ではなく赤面する・・・というわけではなかった、まったく赤面等といった言葉を連

想させない顔色、所謂血の気が引いた真っ青な顔をしている要。

「ん〜大丈夫要？」

要の顔色を見て、またもさっきと同じ可愛らしい声で心配したような態度で声を掛ける鼎。實際要にとつてその声、その態度こそが恐怖の対象であるにも関わらず、鼎はその事実を知らない為に要に顔を近づける。いや、実際は知っていたのだ。要が恐怖している事実と理由に、鼎は知っているのだ誰よりも、自分の今の声、態度が要をひどく恐怖させる事に……。知っていながらも鼎は要に対してこの声、態度で声をかけるのだ。

それは嫌がらせの何者でも無い事にも鼎は気づいている。

「かな、えあの、さあ……………」

「何？はつきり言つてよ」

「絶対に怒らない？」

「え〜何？怒らないよ〜言つてよ」

「うん、あのさ鼎……………その喋り方と態度止めて欲しいな、何か気持ち悪いから」

……………数秒間の沈黙……………

そして……………

「黙れよ、変態」

その発言は、先ほどまで可愛らしい声で言っていた鼎から発せられた。その声は酷く低く、周りを凍りつかせるほどの圧力を持っていた。

そして、発せられた言葉とは裏腹に、整った容姿で綺麗に笑みを作って。だがその笑みさえも、今の要にとっては一番の恐怖の対象でしかなかったのだが……

## 一心同体

「へ、変態って！酷いよ鼎だって人の事言えないじゃん！」

顔を真つ青から真つ赤へと変わった要は、大きな声で叫んだ。まだそんなに生徒は居なく、早朝と事も有り学校外は酷く静かであった。しかしその分要の叫びがよく響くのである。要は叫んでいる最中一年前の入学式の事を思い出していた。しかしすぐその事を頭から振り払い、一旦呼吸を置くとさつきよりかはだいぶ冷静にはなったが、今だ鼎への怒りが治まらない。

「要は自分のことを棚にあげて、人の揚げ足を取るのが相変わらず得意だよねえー」

「五月蠅い！だって本当のことだから、それに揚げ足を取っているわけじゃないし！」

「キャハハ、要ちゃん五月蠅いよ、こんな早朝にそんな大声出したりして〜近所迷惑っていうのを考えられないの？まあしょうがないか、要はバ・カなんだしね。ごめんね要にそんなのを求めた俺が悪かったよごめんね〜」

と皮肉めいた言葉の羅列を容赦なく、要へとむける鼎。そんな鼎の言葉に拳を震わせ、殴りかかりそうな勢いだった要であった。しかしそんな事をすれば自分が目の前の人物に何をされるのかは、冷静に考えずとも分かるので、拳を解いてせめてものの、反抗として鼎から視線ははずし、自身もまた皮肉めいた言葉を吐き出す。

「ハハハ、鼎はそんな馬鹿で変態の双子の兄だもんねえー、双子だから私が馬鹿で、変態だったら鼎の意思とは、裏腹に周りからは私と同じ目で見られることになるよねーこれじゃあ、私達は自治共

に認めるバカ変態兄妹になっちゃうね。私は別に何とも思わないけど、プライドが高くて。自尊心が強くて周りの目ばかり気にしている鼎お兄さんには、少し耐えられないかもねえー」

要自身今言っている事は、小学生並だと分かっているが、それぐらいいないと要の怒りは治まらない。しかし要には鼎の顔を直視しながら、皮肉めいた言葉を言う勇氣も、強い精神も無い為、あさつての方向を見ながら言っている。その姿は第三者から見ればかなりのヘタレであったが、要はそんな事を気にするほどの余裕が無かった。事実体中は冷や汗をかいており、「自分今日の夕日を拝めないかもしれない」などかなりネガティブな方向へと考えてしまっている。

「ふーん、まあそうだよねえ、俺は要のせいでバカ変態扱いされる事になるんだもんねえー」

「う、うんそうだよ」

「でもバカはいいとしてえー、変態はいただけじゃないあだって、俺変態じゃないし」

「な、何ですよ？」

「だって俺……女装に合ってるもん」

「……は？」

そう。誰がどう見ても女子高生にしか見えない鼎は真正正銘、要の實の双子の兄で泉坂 鼎で男である。要とは二卵性ではあるものの、顔は要とそっくりではあるが、背は鼎の方が幾分低い。鼎はとも男子高校生とは思えないほどの童顔で、女顔であり。かなりといていいほど、容姿が整っている。しかも、女装をしているとあって、本当の女子高校生か女子中学生に見えるほどだ。また鼎も、一年の春から女装をしていたが要と違って、その容姿、体格のおかげですぐにはばれなかったのだ。

つまり鼎と要はそれぞれ異性の格好をしている変態兄妹なのである。

## 事実

「女装が似合っつて・・・何言ってるの！」

「だって、本当のことだもん」

「だもんじゃないよ！てかそんな女装が似合ってる似合っつてない関係なく、男の癖に女装が似合っつて、双子の妹として恥ずかしいよ！いや、そもそも女装している事自体恥ずかしいよ！」

「え〜俺が女装似合っつてるのは事実でしょ？だって、俺が男ですって公言するまで皆気づかなかったし〜。まあ気づいている奴はそりゃ居ただろうけど、何も言わなかったて事は、女か男か疑っつていたって事だろ。」

「そつ、そりゃあそうだけど・・・」

「それに、お前だって人のこと言えないじゃねーか、男装なんかしやがって」

「急に口調変えないでよ！あ、てか誰のせいで私がこんな格好していると思ってるの！」

・・・今から8年前。まだ要と鼎が8歳だったころ。

ある日、机に向かつて、宿題をしている要に向かつて、鼎は言葉を投げかける。

「ねえー要ゲームしようよ」

それを聞いた要は、キャスター付の椅子をグルツと鼎の方へまわし、不思議そうに首をかしげる。

「ゲーム？」

「そう、ゲーム！ちなみにxゲームつきだからね！」

「え〜xゲームあるの？やだよ！鼎のxゲーム酷すぎるんだもん！」

「え〜やらないの？」

「や、やるわけ無いでしょ！この前だってトラウマになりかけたんだからね！」

要はそういいながら、その事を思い出したのか、ブルつと体を震わせて真つ青な顔へとなった。一体どんな×ゲームをしたのだろうか、それは要と鼎しか知らない事である。

そして、鼎の方へと向けていた椅子をまたグルつとまわし、再び机に向き合い宿題をしようとしたのだが……。

刹那、『ガシャン！』と大きな音がしたかと思うと、要の視界には机と宿題のプリントではなく、天井と驚くほど可愛らしい笑顔である鼎だった。一瞬何が置きたか分からなかったが、冷静になると状況を理解した。自分が背を向けた事が鼎の怒りに触れたのか、鼎は要の座っている椅子の背もたれを掴み、グイツと自分の方へ（後の方へ）と倒したのだ。キャスターがクルクルと回り、時間差で背中に痛みを感じた要が顔をしかめ、鼎に文句を言おうとしたのだが。鼎の笑顔を見てその考えを瞬時に打ち消した。要は知っているのだ、この誰にも癒しを与える笑顔こそが、鼎の素の笑顔だという事に。そしてその笑顔は人に一瞬だけ癒しを与えると同時に、恐怖を与えるのだ。一瞬その笑顔に癒されるが、しばらく見ていると、だんだん恐怖してくのだ。例えるなら天国から地獄へと落とされた気分になる。

そして何より、鼎がこの笑顔をする時は決まって、機嫌が悪い時、酷く気に食わない事があるときにするので。そんな事を誰よりも知っている要は鼎のこの笑顔がなにより、嫌いで怖いのだ。

「……えつつと……鼎？」

「キャハハツハハ！要え〜やるよねえ〜？」

「えっ？」

「ゲーム！勿論やるよねえ〜？」

「あ、えあ……？」

「てか、やらなきゃ外で歩けないような顔にするぞ」

「やります！やります！やります！」

ほぼ、脅しに近い言葉を実の妹に容赦なく吐く鼎。その表情は相変わらずの笑顔であったが、その笑顔が逆に要を恐怖のどん底へと突き落とすのだ。鼎はそれを知っていながらやるのだ。

「ゲ、ゲームって何するの？」

「うーん、そうだなあ〜」

「……」

「そうだ！プロレスごっこしよう！」

「……アハハツハ私死ぬかもしれない」

その後は、部屋中に要の悲鳴と鼎の笑い声と、何かが折れるような音が響き渡った。

「……バ、ッ、ゲー……ムって何、やる……の？」

「えへっ、その×ゲームってねえ」

そして要は次の言葉を聞いて、本日二度目の恐怖のどん底へと突き落とされる事になる。

同じ顔なのに、表情はまるっきり違つというアンバランスを含めて。

「要が高校に入ったら、男装するの！」

## 事実（後書き）

頑張りました、一気に4話まで書き上げました。その分次の投稿には暫く時間が掛かると思いますが・・・。

4話まで書いたのに、話が全く進展してませんね。まだキャラが双子しか出てませんし、後もう一話までは双子の説明書きみたいなのだと思います。

この小説を見てくださった方、本当にアリガトウございました！すごくうれしかったです。お気に入り登録してくださったのを見て、飛び上がりそうでした！

本当にアリガトウございます！。

## 結果

そして現在。その×ゲームを本当にやる羽目になった要は学校内である意味有名人となっていた。それは鼎も同じであるのだが・・・

鼎が女装している理由は実に単純な事だ、要が現在着ている男子用制服は、鼎が本当は着る物である。そして、要にソレを着せるとなると自分の着るものが無いので、要が本当は着るはずだった女子用制服を着るといっただけであった。それなら男子用制服をまた買えばいいだけのことである。要も入学式が始まる前ソレを言ったのだが鼎は、「え、だってまた男子用制服買うのめんどいし。」と言っただのだ

唯それだけの理由で、女装をする目の前の兄を要は異常な人でも見るかのような目で見ているのだが、それも一年すれば慣れたのか、しなくなった。

そうこうしている内に、時間は過ぎていき始業式の始まる15分前となっていた。その時間帯になると生徒達がゾロゾロと登校してきていた。要達は校門の隅のほうで話していたので、あまり生徒達からは気づかれていなかったが、何人かの生徒は二人に向かって手を振って挨拶をしてきた。それを鼎は可愛い笑顔というオプシヨンを加えて愛想良く挨拶をしていた。それに呆れながら、現在の時間に気づいた要は焦ったように、鼎に話しかけた。

「うわ！もうこんな時間、もうすぐ始業式始まるよ！早く教室戻ろうよ」

「あ、本当だ。」

「一時間も前に来たのに、遅刻なんて事は嫌だからね。」

「え〜でも俺走りたくない、面倒くさいよ」

「いいから！早く行くよ」

「じゃあ。おんぶして」

「小学生か！、普通逆だと思っけどな〜」

「え、だって俺の方が小さくて可愛いし、やっぱり俺みたいな可愛い子がおんぶされた方がいいでしょ〜」

「黙れ、ナルシスト。鼎の場合はロリみただけだね、性格の悪い」

「俺はロリでもナルシストでも性格も悪くない、童顔可愛い系キャラだ」

「キャラって何だよ、てか自分のこと可愛いって当たり前のように言える人をナルシストと言わずに、誰を言うんだよ。それに鼎は悪の塊だよ」

「俺が可愛いのは事実だ、事実を言っただけが悪いんだよ。それに俺は小悪魔系だ」

「小悪魔って、鼎の性格の悪さは小悪魔じゃおさまらない気がする。魔王系みたいな」

「魔王か、・・・ランクSSみたいなレベル999みたいなスリ―9級の魔王？」

「Sが二つつくほどのドSって言う意味なら、ランクSSでもいいと思うよ」

「それだったら、要はランクMMの野犬？」

「MM?!何ソレ?!野犬?」

「Mが二つ付くほどのDM的な意味で、要なんて野犬で十分だよ。攻略ブックにも載らないような敵キャラで」

「酷い！私DMなんかじゃないよ！せ、せめてスライムとか・・・」

「やー」

「やー ジャ無いよ！あーもう本当に遅刻する！もう走るよ!」

そんなやり取りをしているうちに、生徒は居なくなりほとんどが教室に行ってしまうている。それに気づいた要は焦って、下駄箱の方まで走っていった。そんな要とは裏腹に鼎はへらへらと笑っていて、進もうともせず走っていく要の背中を見ている。

そしてスツと目を細めると口角を上げて、黒い笑みを浮かべた。さっきのように唯へらへら笑っているのではなく、何かを企んでいるような笑みを浮かべて。その笑みは妖艶で可愛らしい顔には似合わない笑みであったが、どこか格好良くもあり色っぽく、見るもの全てを虜にしまうような笑みであった。

そんな笑みを浮かべながら、鼎は誰にも聞こえないような小さな声でつぶやいた。

「ハハハッ。やっぱり男装させて正解だったな。その結果一年間誰とも付き合つことが無かつたし。アイツが男装をさせた理由聞いたらどんな反応するんだろぅなあ〜」

そう、言うつと鼎も要の後を追って歩き出した。

鼎は誰にも聞こえないように言った。そもそも周りには誰も居ないので自分の声なんて誰も聞いていないと思っていた。

しかし、実際人は居たのだ。その人物は校門付近の壁に隠れて鼎は気づかなかつたのだが、確かにその人物は居た。そして鼎の咳きをしつかりと聞いてしまったのだ。いや、別に聞こうと思って聞いた訳ではない、たまたま校門付近まで来て鼎の笑い声が聞こえ、反射的に身を隠してしまっただけなのだ。

そして、その人物は校門をくぐり呟いた。要達の通う学校の制服

を着て・・・・・・・・。

「男装？何言ってるんだアイツ？てか、アレ今の男だったよな女装？。ココの学校ってそういう校則とかあるのか？。フツハハハハハツハでも何か面白そうだなあ、その男装しているっていう女の子、暇つぶしに搜してみるか・・・・。アレ、俺独り言多くなっただか？また陽彩に何か言われそうだなあ。アハツハハハハ」

その人物の笑い声は、学校の敷地内に響いた。しかし決して誰にも聞こえることなく、その笑い声だけが響いた高く高く・・・・・・・・。

もしも、この時鼎の言葉を、この人物が聞いていなかったらもしかしたら、物語は変わっていたかもしれない・・・・・・・・。

## 結果（後書き）

はい。5話終わりました！。そしてプロローグ的な話もコノ話で終わりましたよ！

次は、あらずじに書いてあるように、アノ人達が出ますよ。

てか、5話やってまだ双子しか出てナインなんて……。展開が遅すぎですね。

でも、最後らへんには謎の人物みたいなのも出せましたし、自分的には結構進んだ気がします。

ここまで見てくださってアリガトウございました！

## 情報

1-C教室。今だ教師が来ておらず、生徒達はそれぞれ雑談をしており教室内は少し騒がしくなっている。そんな中、要は前の席にいる親友兼幼馴染の高杉タカスギ睦ムコトと雑談をしていた。

「ハア、よかった先生まだ来てなくて。」

「本当に何してたの？今日は早く来るとか言っておいて、遅刻ギリギリなんて・・・」

「ん〜いや、ちゃんと一時間前には学校に来てたんだよ？でもあの、DSやる・・・いや鼎のせいで遅くなっちゃってさ、アハハ・・・」

「ハアー要は兄離れた方がいいよ、私は小学校のころから知ってるけど要と鼎君は、ベツタリしすぎだよ。一回離れた方がいいんじゃない？お互いの為にも」

「別にベツタリしているって訳じゃないけど・・・。そうなのかなあ〜私は双子ってこうゆう物だとずっと思っていたけど、間違ってるのかなあ〜」

「まあ別に間違っては居ないと思うよ。私はお兄ちゃんならいるけど双子じゃないし、そこら辺の心境は理解できないからね。」

「まあ、そうだろうけど・・・。」

そう言うつと要は眉を寄せ、難しそうな顔をして頬杖をついた。

「ん〜やっぱり難しいかな、ずっと一緒だったし」

そういって、次は困ったように肩をすくめ笑った。そんな要の様子に半ば呆れた睦は、要から窓の方へと視線を向けて、誰にも聞こえないような声で呟いた。

「まあ、執着しているのは鼎君のほうだろうけどね・・・。」

「あ、そういえば今日転入生が二人来るらしいよ」

「へえーそうなんだ。まあコノ次期なら転入生ぐらいくるでしょ」

「相変わらず反応薄いなあ。要は、でも噂によるとその転入生っていうのが、双子らしいんだよ」

「へえー双子かあ、それなら興味あるなあ」

「でしょ？しかも男女の双子だって！これは結構な偶然だよ！しかも同い年」

「すごいねえ。てか、その情報はどこから仕入れてきたの？」

「フッフ！要さん世の中には知らなくていいことがあるのですよ！」

「睦……口調変わってる……」

「まあでも、それなら仲良くなる価値はあるよねえ」

「だよね！」

「あ、でも要さん？貴女は自分の今の格好をちゃんとご存知ですか？というか現実から目をそむけてませんか？」

「ハハハ！そんな、そむけてなんかいませんよ！私はちゃんと自分の格好を自覚していますよ！」

明らかにわざとしか思えないように、焦りながら自然と声を大きくしてしまった要。そんな要にまたも呆れてしまった睦は要を少し落ち着かせると、要の机にひじを突いてあからさまなため息をついた。そんな睦の態度に顔を不満そうに少し歪める要。

「まあ、私の格好とかは置いていて、やっぱり私達と同じ境遇の人とは仲良くなりたいしね」

「まあ、そうだろうけど……」

そついいながら、不満な顔から嬉しそうな顔へと変える要。そんな要とは裏腹に睦は自分でも分からない、いいよのない不安につつまれ、眉を寄せ要のことを心配したような顔へとなる。

睦は気づかなかつた、気づく事が出来なかつたのだコノ不安がなんなのかを……。

この時に気づくべきだつたのだコノ不安の正体を……。

## 転入生

それから要と睦が7分ほど話していると、担任の教師が来てそれから始業式へ行く為に、体育館へと移動した。

後に1時間ほど校長の長つたらしい話やらで、ほとんどの生徒が夢の中へと意識を飛ばしている。そんな中、要と鼎は眠る事は無かった。二人とも本当は睡魔がさまざま襲ってきているが、眠る事が出来なかったのだ。お互いの座っている席は離れていて、顔はおろか姿さえも確認できないが二人とも同じ何かを感じ取っている。

二人とも誰かの視線を感じている。別に睨まれたり、殺気を感じたりしていないのでそこまで気にする事は無いが、この双子は少々警戒心が強いいため眠ったりしないうで気を緩めることはしなかった。二人とももしかしたら、何か危険な事が生じるかもしれないと思っている。……しかしそれは取り越し苦労だったのだが、ある意味鼎にとっては危険な事かもしれないが……。

誰かの視線を感じるものの、その正体が見当たらず始業式の途中ともあって、二人とも席から立ち捜すなどということはせず、警戒しつつも大人しく席に座っていた。

それから20分ほどたち始業式が終わった。その後はクラス発表が行われた。もちろん双子なので鼎と要が一緒になる事は無く、要と睦はまた同じクラスになった。要達は2年C組に鼎はB組になった。

そしてそれぞれ教室移動が終わり、まだ担任が来るまでは時間が掛かったのでまた、それぞれ雑談を始めた。

ある意味要達は有名人で、要は特に女子に人気があるが、男子としては男装している女子などを恋愛対象としてみる事ができないので、顔は良いがそれほど男子にモテることはなかった。

それで要の周りには女子が多く集まり、それらと睦と雑談をしていた。

「鼎君と同じクラスに離れなかったけど、要ちゃんと一緒になれたからよかったよ！」

「私も、要ちゃんと一緒になれて嬉しい」

「それに、鼎君とは隣のクラスだしねえー」

「2年生では楽しくなりそうだね！」

そう言われた要は、集まっている女子に向かって、とびきりの笑顔を向けて言った。

「うん、自分も皆と同じクラスになれて嬉しいよ」

その笑顔を見て、その言葉を聞いた女子たちは皆いつせいに顔を赤らめた。しかし睦は例外で顔を赤らめる事は無く、呆れたような目を要に向けた。要はその視線に気づくことなく今だニコニコと笑っている。睦はそんな要の腕を掴み自分の方へと引き寄せ、誰にも聞こえないように要に耳打ちした。

「ねえねえ、今の笑顔と言葉って、もしかして女子が喜ぶと思ってワザとやった？」

それを聞いた要は、さっきとは違い若干黒い笑みを浮かべた。

「そうだよ、やっぱり第一印象はよくないとね。女子は怒られると怖いし後々面倒な事になるからね」

そう言うと要は、睦の元から離れ女子の方へと向かった。それを見て睦は若干顔を青くして、乾いた笑いを思わずこぼしてしまった。

(アハハ。やっぱり鼎君の双子の妹だね、今のは結構腹黒かったよ。やっぱりあの二人顔だけじゃなくて、性格も似ていたんだね。・・・  
・・・なんか二人の将来が心配になってきた)

そんな事を思われていると知らず、要は女子たちと雑談をしていた。もちろん作り笑いをつけて・・・

それから暫くして、新しい担任が来たので皆それぞれの席に着いた。そして担任はホームルームを始めた。

「えー、自分が新しくC組の担任となった高城です。まあよろしく。」

「それと、今日は転入生がこのクラスに来る事になりました」

「先生、男子ですか？女子ですか？」

「男子だ。まあ女子は喜ぶだろうけど落ち着いて黄色い声をあげたりしないように」

「それじゃあ、入って」

それまで皆騒いでいたが、一気に静かになり女子は特に期待を込めた目で教室のドアへと目を向けている。それは要も例外ではなく、じっとドアの方へと目を向けていた。しかし要としては顔がどうこの問題ではなく、自分と同じ立場である双子の片割れの存在に興味があっただけだった。

そして、ドアがガラッと開き一人の男子が入ってきた。そして担任の隣まで来て・・・

「始めまして、雅等黄 太陽です。よろしくお願ひします」

最高の笑顔を向けて自己紹介をした……。

## 転入生（後書き）

少し間が空いてしまいましたが7話です！正直もつと早く書きたかったんですが、話の内容とか流れとか全く考えていなかったの遅くなってしまいました。

私は書く前にちゃんと話の流れとか考えていなくて、今回も「最後に転入生だせばいいかなあ」としか考えていませんでした・・・orz。

毎回話を書いている途中で、内容とか流れとか考えながらやっているの、一番最初に考えたこの物語の、全体の内容とか離れていくと思います。

まあ私は中学生ですでに夏休みにはいつているので、もつと早く書いていこうと思います。夏休み中に10話書けたら、いいほうです。

ココまで読んでくださりアリガトウございました！

## 視線

「キヤアアア！！」「かつこいい！」「うわあーイケメン！」「背たかーい！」

そんな女子たちで教室は黄色い声が響き渡っていた。それもその筈、教室に入ってきた転入生、

マサラキ 雅等黄 タイヨウ 太陽は、癖のある茶髪の髪に180以上はあると見える高身長。そしてなにより愛嬌のある女性受けの良い整った顔立ち。しかもその容姿で爽やかな笑顔を向けられたら、女子が騒ぐのも無理はない。しかしその反面、イケメンな転入生の登場に男子達は複雑な表情を浮かべているが、女子たちはそんな男子達には見向きもしておらず、目をハートにさせ太陽をマジマジと見つめている。そんな女子たちの反応に太陽は肩をすくめて困ったように笑った。

教室中の人間が太陽に意識を向けている中、要は太陽の事には変わりないが明らかに周りとの路線がずれている事を考えていた。

（マサラキ タイヨウって変な名前だなあー。漢字ってどう書くんだろっ何かめんどくさそうな漢字っぽいなあ。あーでも印象が強く覚えて覚えやすいからいいなあ。人の名前覚えるの苦手なんだよね、結局1年のクラスでも全員覚えられなかったし。・・・てか名前を覚えなかったってちょっとてか、かなりおかしいね。睦にこんな事言ったら。呆れられそう、それかきつと「クラスの名前覚えなかったて、結構酷いよね」っていいそうだなあ。うん、絶対言う睦なら）

要はそんな事を表情には出さずポーカーフェイスで、グルグルと頭の中で考えていた。しかも色々と考えすぎて最終的に最初の太陽

の話題から路線が大きくずれ、全く違う事を考えてしまう始末。

周りの女子とは違い要は、太陽の容姿には全く興味が無く、無関心だった。それもその筈、要自体顔は中性的でかなり整っている。なにより双子の兄鼎が男女ともに好かれる整った顔をしている。その顔が例え自分と同じ顔立ちでも、その顔が良いのは変わりはない。そんな自分の顔と鼎の顔を毎日見ていれば、今更顔の良い男子が現れても何も感じないのは当たり前だった。

そんな中、睦も周りの女子とは若干違う事を考えていた。

（あーまあお約束ですよねえ。転入生がイケメン男子というシチュエーションは。でも本当にかっこいいなあ・・・イヤ別に今更顔の良い男子を見ても何も思いませんが。その前に私には竜がいるでしょ！てか、竜の方がカッコイイ！うん絶対に！ それにあの性悪の兄や、幼馴染の双子の顔をほぼ毎日見てるしなあ。本当今更だよでもカッコイイ転入生が来たらしかししたら、要にも遅い青春と言うものが来ると思ってたんだけど・・・要も今さらだよねえ、あの子の事だからきつと顔の良い転入生を見ても何も思っていないだらうなあ。てか絶対そうだ！・・・イヤ例え要が転入生に恋愛感情を抱いたとしても・・・あの人許さないだらうしね）

そんな事を心中に色々と考えている睦。思わずため息を吐き出しそうになったがソレを耐え飲み込んだ。実際睦は太陽に興味が無い・・・と言うわけではない。事実その顔立ちに関心もしたしカッコイイとも思った。しかし睦には中学から付き合っている黒崎クロザキ 竜リュウ という彼氏が居て、しかも双子が「バカツプル」と称するほど。実際睦は竜にかなりベタばれで竜も睦にベタばれの状態で、付き合った頃から現在までそれは健在である。そんな竜弱愛状態の睦が顔の

良い転入生、太陽を見たところで、かつこいいとは思っても一目ぼれや黄色い声を上げるなんて事は絶対にありえない事である。それに幼馴染の顔が良い双子をほぼ毎日見ているのも理由の一つである。

黄色い声に包まれていた教室だが、今まで口を閉ざしていた担任が横に立つ太陽に向かって口を開いた。

「あーそれじゃあ。雅等黄君はその窓側の席に座ってね。分からない事があつたら周りの席の人に聞いていいから」

「はい。」

太陽はそう言うと、担任に指定された席へと移動する。要は太陽を通り越して窓側の席の方に視線を向けた。すると太陽の隣の席の女子は顔を赤らめていた。感情を抑えている様子だったが、嬉しがつてる様子は要には丸分かりだった。そんな女子から視線を外すと要は黒板の方へと視線を戻した。すると「ガタツ」と椅子を引く音がしたので、太陽が席についたのだと分かる。

そして再び担任がホームルームを再開し始めた。・・・その時要は誰かの視線を感じた。始業式と全く同じ視線を感じたのだ。そして要は黒板から視線のした方へと目を向けると、その先には・・・太陽が居た。明らかにこちらを見ていたのだ。要が自分に目を向けたのに気づいたのだろう太陽はハツツとして、一瞬驚いたような顔をしたが次にはヘラツツと笑って見せたのだ。その笑顔に要は思わず気が抜けてしまった。そして太陽が黒板の方に目を向けたと気づくと要もまた黒板へと視線を戻した。

太陽の視線が気になったが要は

（きつと私が男装しているから見てたんだよね。始業式の時も私を

見たからあんな視線を送ったんだろうなあ。少し考えすぎたっかな）と考え自己解決した。

今の要の格好を考えればそう考えるのは当たり前だ。

しかしその考えは実際は間違っていたのだ。……しかし要はその事実には気づかない。

太陽が誰にも分からないように笑ったのも、一年前の入学式の鼎と同じように笑ったのを要も誰も気付かなかった……。

## 視線（後書き）

……すいません!!

……全く話が進展しませんでした! ……すいません。

実際7月の終わりに8話を書いていたんです……書いていた途中で間違つてソレを消してしまつて。自業自得なんですが、一気に入る気がうせて、更新が8月になってしまつたんですが、消してしまつた最初の話とは結構違う流れになってしまつて進展させる事ができませんでした。最初に書いたのは進展してたんですが、更新する気になつた時はその書いたのをすっかり忘れてしまい、また新に書いたんですけど……結果がこれだよ!

あまり長く書いても読む方はきついと思つたのでココで区切らせていただきました……。

ココまで読んで下さりアリガトウございました!!

## 片割

その後ホームルームが終わり担任は、「じゃあ。これで今日は終わりです」といつてすぐさま教室から出て行ってしまった。

担任が出て行ったら、案の定女子たちは太陽の元に駆け寄っていた。それからは女子たちからの質問の荒らしである。要は席から移動せずその様子を椅子に座って眺めている。

「この次期に引越してやっぱり、親の仕事の都合なの？」

「うん・・・まあそんな所」

「へえ、大変だねえ。雅等黄君」

「あ、別に苗字で呼ばなくていいよ。俺の苗字呼びにくいでしょ」

「本当！じゃあ太陽君って呼ぶね！」

「雅等黄って名前珍しいね。あんまり居ないと思うよ同じ苗字の人」

「うん、そうだよな。小さい頃は苗字の事気にしてたんだけどね」

「そうなんだあー」

「太陽君は付き合ってる人いるの？」

「え、そんな別に居ないよ・・・」

「本当？太陽君カッコイイからモテそうなんだけど」

「え、そうかな？ありがとう。でもそんなもてたりしないよ？」

「えー嘘？前の学校でもすごいモテてると思っただけだ」

「アハハ。でも特定の彼女とかは作りたくないかな・・・」

「えー？どうして?!」

「だって、特定の彼女作らなければ・・・皆と遊べるしね」

「・・・キヤああーカッコイイ！」

そんな女子と太陽たちの会話を一部始終聞いていた、男子達と要と

睦の思っている事が一致した。

（ ）（ ）（馬鹿だこいつ等・・・）（ ）（ ）と・・・。

今だ女子たちに囲まれ、笑顔を振りまきながら話している太陽を呆れた目で見ている要。

睦は今日配られたプリントなどを鞆にしまつと、鞆を持って要に近づいた。

「あーもう要、鼎君呼んでもう帰ろうよ」

「あーそうだねえ」

そういいながら要は鞆にプリント等をしまい、席から立ち上がった。ソレを見ていた睦は、要が立ち上がったのを確認すると今だ黄色い声をあげている女子たちの方へと目を向け、要だけに聞こえるように言った。

「あー、何か期待したけど・・・唯の女たらしの馬鹿だったみたいだね」

「女たらしの馬鹿って・・・睦も案外酷い事言うよね」

「別に・・・君達双子よりかは酷くないと思うけど・・・。だつてそうじゃん」

「いや、まあ女たらしなのは確かっばいけど、馬鹿かどうかは・・・」

「明らかに馬鹿っぽく見えるけど・・・」

「え?!何よそれ?・・・あー確かにそうかもしれない。私竜と居れて幸せすぎだから・・・気が抜けて馬鹿っぽく見えるのかも・・・。そういう意味だったら馬鹿っぽく見られてもいい気がする・・・」

「・・・はいはい。惚気はいいですからね」

竜のことを考えているのか、睦はどこか上の空で回りにハートの散らばせている。要はそんな睦に心底呆れながら、苦笑いをこぼした。すると何処かに意識をトリップしていた睦は、何かを思い出したのかハツつとなった。そして視線を女子に囲まれている太陽へ移すと、口を開いた。

「そういえば、私の聞いた話では転入生双子だって聞いたけど。その片割は何処のクラスに入ったんだろうね。確か女子って話しただけ・・・」

「あー、そういえばそうかもね。その女の子はどうなんだろうね。やっぱり馬鹿なのかな？」

そういうと二人とも女子と太陽の話に耳をすませた。

「あー！そいえば。太陽君確か双子だったよね？」

「あーそうだよ」

「へえーそうなんだあ！どんな子？女の子？」

「えっと、女だよ、陽彩ヒイロって名前だよ」

「そうなんだ。その陽彩ちゃんは何処のクラスに入ったの？」

「えーっと確かB組だったかな」

「へえーじゃあ隣のクラスだね！」

そんな女子たちの会話を聞いていた二人は、驚いたように目を見開いた。今、二人の脳内にはB組でクラスを中心になっているであろう、鼎の姿がある。

同じ男女の双子で片割が自分と同じクラスになっている時点で、すごい偶然なのに、要の片割鼎と太陽の片割、陽彩が同じクラスになっているという事実二人とも驚きを隠せない様子だった。

二人とも内心誰かが仕向けたんじゃないだろうかと、馬鹿な考えをしていたがそれほど二人にとってはこの事が驚きなのだ。

要は鼎も今頃この事実気づいて驚いているだろうと考えたが、その考えは瞬時に打ち消した。良く考えてみれば、鼎は比較的冷静沈着で肝がかなり据わっている。そんな鼎がこんな事で驚く事はまずないだろうと考えたからだ。

確かに鼎はこの事実を知って驚きはしなかった。驚かなかったが鼎の心中は不安が絶えなかったのだ。この言いよの無い不安は何なのか分からないまま、鼎はもう一人の片割太陽と会う事となる。

そして、この言いよの無い不安の正体は、太陽に会った時に理解する事となる。

鼎にとってはとても嫌なこの正体を理解する事となる。

## 転入生（鼎編）

時間は少しさかのぼる。2年B組。

「始めまして。雅等黄 陽彩です。よろしくお願ひします」

黒板の前で、雅等黄 太陽の双子の妹 雅等黄<sup>マサラキ</sup> 陽彩<sup>レイロ</sup>は無表情のままそう言った。鼎は緊張で顔が強張っているのかと思ったが、良く見ると全然そんな様子はなく。本当に無表情であった。鼎はその様子に若干気になっていたが、正直陽彩のことは全く興味がないので、すぐに意識を別のものへと移した。

陽彩は太陽とは違い、身長がかなり低い。鼎より数センチ低いくらいだ。しかしその顔は可愛らしく、まっすぐな艶のある黒髪を後で一つに結んでいる。兄同様かなり顔が整っているのだ。

顔や体格自体は太陽と大分違いがある。太陽が大人びた顔立ちなら、陽彩はその逆、幼い顔立ちだ。しかし正反対な顔立ちをしているものの、やはり双子なのか太陽と陽彩はどこか似たような雰囲気を感じ出していた。

そんな陽彩の容姿に惚れる男子は、勿論いるわけで。女子もその小動物のような可愛らしさに、心打たれている様子だった。2・B組の殆どが陽彩を意識している。

ただ一人鼎を除いては……。

鼎の視線は陽彩に向けているものの、意識はこれから何をしようかな、等と全く別のものを考えている。そうやってボーっとしている鼎は誰かからの視線を感じて、ハッととした。

その視線をたどると……。陽彩がいた。視線は確実に鼎を捕ら

えており、その顔はさつきと同様無表情であった。そんな陽彩を鼎は訝しげに見ていたが、思い出した。

あの始業式のように感じた視線を、それは今陽彩が鼎に送っている視線と全く同じものであった。

（こいつかぁーあの視線の正体は……。てかなんだコイツ、無表情で感情読み取りにくいなあ。こうゆう扱いにくい奴俺大嫌いなんだよなあ。まあ……。関わらないようにしよう、後々めんどくさそうな事になりそうだし……。）

そう考えると鼎は陽彩から視線を外し、窓の方へと向けた。でも陽彩は確実に鼎を目で捕らえている。

鼎はそんな居心地の悪さに若干、眉を寄せた。

（何なんだよコイツ。いみわかんねえ、てか俺が女装してるから珍しくて、見ているのかと思っただけど、何か違うみたいだなあ。無表情で気味悪いし。それにあんな風にずっと見てたら、喧嘩売ってる様にしか……。てか、あれ？もしかしてワザと見てんのかあ？アイツ。もしかしてワザと俺をムカつかせようとしてんのかあ。）

そう思い鼎は窓から陽彩へと視線を戻した。すると陽彩は鼎を馬鹿にしたようにフツツと笑ったのだ。

（ああ？何だよあいつ！むかつくなあ！）

その様子に鼎は心底いらだっていたが、表面上にはまだ出していない。陽彩が自分をワザと挑発しているのだと気づいてから、尚更苛立っているのを陽彩に知られるわけにはいかないと考えたのだ。

すると鼎は、フツと作り笑いを陽彩に向けると……  
ロパクで 「ブラコン」といったのだ。

陽彩は「ブラコン」と言ってるのが分かったのか、表面上は相変わらず無表情だが若干青筋を浮かべていた。周りの人間はそれに気づいていないようだったが、鼎はソレが安易に分かった。

そして二人は暫くだれにも気づかれないように、睨みあい、火花を散らしていた。

お互いの第一印象は……

「ムカツク奴」だった。

## 玩具

2年C組 教室内

「要ー帰ろう」「太陽帰ろう」  
なった

鼎と陽彩の音が重

「あ、鼎。うん」「陽彩、そうだね」  
った

要と太陽の音が重な

「……」

4人が沈黙した

(ふ、双子が揃った……)  
その様子を見ていた睦は何故か言い知れぬ不安があった。別に唯二組の双子が揃ったというだけなのに何故か不安が耐えない。

今だ沈黙している4人だったが、一人の女子生徒がその沈黙を破った。

「あ。そっか要ちゃんと鼎君も双子だったね」  
「えっ？双子？」

そんな女子生徒の言葉に太陽と陽彩が目を見開き、鼎と要を交互に見た。そしてしばらく二人を見合わせた後納得したように「うんうん」とうなずいた。

「なるほど。双子そろって変態だったんだ」  
太陽と陽彩の言葉が重なった。

そんな雅等黄兄妹の発言に、教室内は静寂した。

確かに双子揃って、異性の格好をしていれば確かに変態だ。ソレは要も重々承知している。(鼎は分からないが・・・)

しかし、今まで周りから冷ややかな視線は受けたものの、その整った容姿のおかげで変態だとは言われた事がなかった二人にとって、ここまでではつきり言われるとそれほどショックを受ける・・・

ものだと、睦は考えていた。しかしソノ考えは一瞬にして打ち碎かれる事となる。

「いいじゃん。似合ってるんだから」

鼎のその言葉で雅等黄兄妹は言葉をなくした。鼎の自意識過剰な言葉に要は頭を抱えた。

たしかに鼎の女装はかなり似合ってる。そこらへんの女子よりも力ワイイ。しかしココまではつきり言えるのもどうかと思う。要はコノ自意識過剰な変態と同じ血が流れていると思うと、また頭が痛くなった。

要は自分が変態だとちゃんと自覚しているから、変態といわれてもなんとも思わない。鼎はきつと自覚していない。この姿がかなり似合ってるのだと分かっているから変態といわれても、カワイイからいいと思って特に怒ったりもしない。

雅等黄兄妹は自分たちの発言に怒るものだと思っていた、イヤ寧ろ。変態といったのは二人とも完璧確信犯でわざと怒らせようとしたのだが、泉坂兄妹の反応は二人が想像していたものとは全然違う。拳句の果てに一人は開き直った発言をし、雅等黄兄妹を驚かせた。

そんな驚いている雅等黄兄妹の心境を知ってか知らずか（きつと知っている）鼎は気にすることなく、要の手をとり教室を出て行った。要が非難の言葉をあげる暇もなく、鼎はそそくさと靴箱のほうへ行ってしまった。

そんな二人の背中を唯呆然と見詰める雅等黄兄妹と睦と C組の  
たち。

そして太陽と陽彩はしばらく、二人の背中を呆然と見ていたが、二人の背中が見えなくなると、今だ呆然としている人たちに気づかないように

笑った

( (アノ二人面白い) )

同じことを考えて

笑った

ソレは新しい玩具を見つけた純粹な子供のような笑みだった。

太陽と陽彩が笑った事に 誰も気づかない

## 崩壊直前

「鼎！止まってって！」

鼎に引つ張られるまま、学校を出て家へ向かっていた。要は鼎に腕を引つ張られながら、内心イラついて鼎の背中に非難の声を浴びせた。

その声に鼎は立ち止まり、要も自然と立ち止まる。

鼎はクルツと要の方を振り向くと、見とれるほど綺麗な笑顔を向けた。

「要ちゃん」

そんな鼎の男にしては高い声に、要はビクツと恐怖で肩を揺らした。鼎が要をちゃん付けするときには絶対何か不満を持っているのだと知っているからだ。

要は冷や汗を流して震えながら、自分は何かしたのだろうかと考えた。どちらかという自分ではなくアノ転入生達がしたのだが、あの時の鼎は特に気にすることも無かったし怒ってる様子でもなかった。

だったら鼎は何を不満に思っているのだろうか？ 要の不安と疑問は

募るばかりだった。

「要ちゃんさアノ転入生には関わんなよ？」

「は？」

てつきり自分に何か罵倒を浴びせかけるのかと思っていた要は、鼎のソノ言葉にまぬけな声を出してしまった。

関わるなど言われても同じクラスだし、しかも先ほどアンナ事が起こったのに関わる無いというは無理な話だ。しかも要自信アンナ事を言われても自分と同じ立場のあの兄妹に興味があるのは変わりない。

それなのに関わるなどというのは、少し無理な話だと鼎に非難しようと口を開こうとした。

「要ちゃんが、アノ二人に興味があるのは手に取るように分かるけどさー。アノ二人は駄目だよー」

要が言葉を発する前に鼎が首をふりながらそう言った。その表情は鼎にしては珍しくどこか不安がっているようだった。そんな鼎を見て要は目を丸くして驚いた。

今までに鼎がココまで不安になったことがあるだろうか……。イヤあったとしても、ソレを絶対に表情にも表にも出さないのが鼎だ。そこはやはり双子だ。要も鼎も素の感情を表に出すことはあまり無い。人に弱いところを見られるのを二人とも極端に嫌っているからだ。特に鼎は双子の妹である要に、さえ弱みを見せたらしないほど、素を出したくないのだ。

そのことを誰よりも知っている要は、鼎のソノ変異に心底驚いている。

「え。何で？ どうして駄目なの？」

「だってアノ二人って「鼎君！ 要！」」

鼎の言葉を遮って後から、聞きなれた声が聞こえた。振り向くと睦が遠くから走って来ていた。それでようやく睦を置いてきたことに気づいた要は、睦に近づこうと駆け寄ろうとした。

しかし　　睦の後ろにいる人物を見て足を止めた。

「あ。アレ？ 何で二人が……」

要のそんな呟きに鼎も後ろにいる二人の人物に気づいて、顔を強張らせた。そんな鼎に要は気づくことなく二人の人物を呆然と見ていた。

睦の後ろに居た人物は 雅等黄兄妹だった。

走ってくる睦と違い二人はマイペースに歩いてくる双子。太陽はヘラヘラとした気の抜けるような笑みを浮かべ、反面陽彩は全くの無表情だった。

要の変な様子に気づいた、睦は一旦立ち止まって後ろを振り向いた。

「ええ！何で二人がココにいるの?!」

(今気づいたのか)

どうやら睦は二人がいたことに今気づいたようだ。そんな睦の鈍さに要は呆れ思わずため息を漏らした。

「え？だってー俺たちの家もコッチ方向だし？」

太陽は相変わらずヘラヘラとした笑みを浮かべて言った。その言葉に睦は納得したようにうなずいた。

そして3人が要と鼎の所まで来ると、鼎が不満な顔をして双子を見据えた。

「何か用かなー？帰らないの？」

言葉自体は柔らかいが、殺気を含んでいた。それに気づいている要と睦は内心冷や汗をかいていた。それと反面雅等黄兄妹はその殺気に気づいているのか、いないのか・・・相変わらずの表情だった。

「ん？ちょーつとねー君の妹に用があるんだー」

「は？私ですか？」

太陽の言葉に要は首をかしげ、鼎は眉を寄せ眉間の皺を増やした。

そんなことに気にすることなく 太陽は要に近づくと、身長をあわせるように腰をすこし曲げ、要に顔をグッと息が掛かるほど近づけ要を見下ろした。

「アノねー俺と付き合ってくれない？」

「ハア？」

平穩な毎日是谁かの気まぐれで  
簡単に崩壊するのだと  
早く気づくべきだった

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0659m/>

---

C R O C U S

2011年10月7日01時56分発行